

Title	思春期心性の問題点(1) : 登校拒否について
Author(s)	氏原, 寛
Citation	大阪外国語大学学報. 43 p.121-p.134
Issue Date	1979-02-19
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80732">https://hdl.handle.net/11094/80732</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 思春期心性の問題点（１）

——登校拒否について——

氏 原 寛

Some psychological problems of adolescence (1)

— on school refusal —

Hiroshi UJIHARA

The cause of school refusal is, I believe, a failure to assimilate to “paternal principle”. Children should advance to the paternal-objective world from the maternal-subjective one and confront with their own limitations and inferiority. School refusal means escape from a situation where they have to face their relativity. Here the author formulates the meaning of “paternal principle” and suggests a way of treating children as well as explains the conditions of the schools and family environments which are apt to disturb children the assimilation of “paternal principle”.

## はじめに

思春期の問題は、単に理論的にだけでなく、実際の面からもなお考察されねばならぬ点を多く含んでいる。近年わが国でも、臨床心理学ないし精神医学の側からする発言の増えていること（たとえば、中井・山中 1978など）は、その表われであろう。私自身は、思春期とは、今まで本人にとってネガティブであったものを、ポジティブな全体像にくみ入れる時期、と考えている。そしてその際、ネガティブな面を丸ごと受け入れてくれるポジティブな存在が、きわめて重要なのだと思う。多くの場合、それは親ということになるが、時には教師ないし年長の親戚ということもある。もしこうした先達に出会わなかった時、子どもたちは一種の仲間集団に拠り所を求めるかもしれない。しかし、その集団に成熟したおとなのいない時、これらはネガティブな準拠集団となって、子どもたちに、やはり存在するポジティブな側面を見失わせることになりやすい。非行集団ないしある種の大学応援団などにみられる異常な行動がそうである。だから、思春期ないし青年期を無事のり切るためには、適切なおとなの関与が不可欠なのである。もしこれがうま

くいかないと、子どもたちは様々な不適応行動を示すようになる。

そこで今回は、まず登校拒否について考察することにする。これは、おとなの側からみれば、いかにうまく子どもをつき放すか、という問題とかかわっている。別ないい方をすれば、親にまきこまれすぎて、不登校現象が生じているということである。それらの問題を、父性原理および母性原理の問題として考えてゆきたい。

又、次回には非行の問題をとりあげる。登校拒否と同じ基盤を持ちながら、現われとしてこれには、親とのつながりの欠如という、一見まきこまれとは正反対のメカニズムがあると思う。そうした両面から見てゆくことが、この時期の不適応の意味を一そう明確に思うからである。

もちろんそれだけで、思春期心性の問題がすべて尽くされるわけではない。しかし、心理臨床の実践家の一人として、私がナマに接したケースの多くが、このカテゴリーに属するものであった。そして、そのような実践を通して、そうした子どもたちにみられる独得の心性が、程度の差こそあれ、あるいはこの時期の子どもたち全体にも同じように働いているのではないか、という感じがする。あえてこの二つのテーマに絞って、思春期の問題を考えてみようとする所以である。

## 1. 登校拒否について

### (1) 問題点

登校拒否についてうんぬんされるようになってからすでに久しいが、発症件数は一向に減少しているようにはみえない。むしろ、女子をも含めて増加の傾向すらあるようである。個々の症児についてみれば、すべて何らかの個人的な心理的ひずみの結果に違いないけれども、巨視的にみた場合、エリクソン(1978)と同じく、これがよりスケールの大きい社会的状況を反映していることを認めざるをえない。つまり、敗戦後のわが国における急激な社会的変動が、いやおうなく個々の家庭をまきこんで、それがひとりひとりの子どもの上にさまざまな影を落している、というわけである。医師と心理学者とを問わず、心理療法にたずさわる人たちの間から、期せずして「日本文化論」的な論議が起ってきた(たとえば、土居1974、木村1972、河合1976)のも故なしとしない。それらを概括すれば、日本の社会ないし日本人の心情は、要するに母性的だ、ということになろうか。

もちろん、不登校現象は日本だけに限られたことでなく、そもそもこういう形での子どもの不適応現象が最初に報告されたのは、アメリカにおいてであった(Johnson, 1941)。以来、おびただしい数の報告がアメリカでもわが国でもなされている。それらをひとつひとつここでとりあげることはできないけれども、不登校現象が、幼稚園から大学にいたるまでの年令的な広がりを持ち、単なる怠学から重篤な精神病にいたる多様な病因をもつものであることは明らかにされつつある。

したがって、登校拒否といっても、どの年齢層のどのような病因によるものかをまず明確にしない限り、決定的なことは何もいえないような印象をうける。

ひるがえってその治療法について考えると、とくにわが国では、いわゆる受容、つまり病児を無理に登校させようとししないで、その気持ちをうけ入れてゆくこと、が金科玉条のごとく信じられている節がある。これは、この問題がまず学校現場で発見され、最初にその解決にとりくむ専門家が教師であることと関係がある。当初は、普通のやり方、たとえば説得、強制といった方法がとられ、熱心な指導が実を結ぶこともあったが、多くは失敗し、そのうち、これは一種のノイローゼであって、医師でない教師の手には負えない、といった考え方が強くなってきた。そのため、教師の症児に対する態度が、次第にはれものに触るような消極的なものになり、それが無理に登校させない、つまり広い意味の受容(?)的態度につながった、といえなくもない。

もちろん、病因が多様であれば、それだけ治療法も多様でなければならない。しかし実際には、症児がどのタイプの不登校であるのかを初期に正確に把握することは困難である。かつ、後にのべるように、必ずしも親の責任とはいえぬにしても、発症と家族関係との因果関連を否定することはできない。だから、直接子どもに働きかけると共に、家族に働きかけることによって、間接的效果を狙う方が有効な場合もある。したがって、個々のケースについて、どのようなアプローチが望ましいかは必ずしもいえぬことが多い。

また、多様なアプローチといっても、ある一つの方法で十分といえることはむしろ稀で、いわば多面的アプローチというか、つまり、治療者、教師、親のそれぞれが違った役割を分けて、ある者は厳しく、あるものは優しく子どもと触れあうことも考えねばならない。しばしば、立場の差からくる方法論の違いが、よいチームワークのもとでは相乗的效果を発揮するのに、意見の対立が感情的なくい違いにまで発展して、折角の協力相手がバラバラになっているのは残念なことである。何れにしろ、治療の方針は個々のケースの特殊性に応じて立てられるべきで、とても一般論としてうんぬんできるものではない。

以上のことをふまえた上で、今回は、いわば社会的な面から登校拒否について考察し、それに基いて、どのような態度で症児に接するのが望ましいのかを、やや思弁的になるのを怖れずのべてみたいと思う。

## (2) いわゆる母性原理におけるつまづきについて

一般的にいて、わが国の登校拒否児に対するアプローチが受容的であることは、すでにのべた。これは、別ないい方をすれば、母性的といってよいかもしれない。母性性の意味は、とても一言では尽くせないけれども、それが、いわゆる無条件の受容という面を含んでいるのは確かだと思う。子どもの成長に当って、こうした受容が決定的に重大な意味を担っていることには、疑

問の余地がない。それが、基本的安定感の形成と重要なかわりをもつことは、多くの人の指摘するところである（マッセン他1971、エリクソン1977）。

たとえば、生後一年目の赤ん坊はまったく無力な存在であって、周囲の暖い配慮なしには生存することさえできない。人間は、生物学的には当然胎内にあるべき期間を赤ん坊として暮すのだ、という（ポルトマン1972）。だから、この時期、十分に世話されるか冷たくあしらわれるかは、自分が世界にうけ入れられているか拒否されているか、という基本的なムードの形成にかかわるのだという。この時期における母親ないしその代理との接触の欠如は、しばしば子どもに重大な欠陥をもたらす（ボールビィ1978）。アメリカ文化圏では、生後2年目は排泄訓練の時期であるらしい（マッセン他1971）。この時期の問題は、環境に対する支配権についてのものである。つまり、排泄訓練とは、それまでもっぱら受身であった赤ん坊が、はじめて、周囲の期待に応えることを意味しているからである。

われわれが生きてゆくということは、まさしく自分をいかにこの世界に生かしてゆくか、ということの意味している。しかし、そのことは同時に、自分をいかにこの世界に合わせてゆくか、ということと矛盾しない。ルールないし制約は、しばしばわれわれを縛るもの、われわれの自由なありようを妨げるものと考えられがちであるけれども、すべての芸術作品が示すように、われわれの実感、何らかの形式に従って表現された時、一層の迫力をもってわれわれの心を打つのである。また、あらゆるゲームがそうであるように、一定の人工的な制約の中で、最大限に自分の可能性を試す時、われわれは大きな充実感を体験するのであって、何の制約もない無制限の自由は、かえってわれわれにどうしようもない不安と空しさをもたらすだけである。しばしば指摘されるように、われわれの存在のもつ有限性が、かえって一刻一刻の意味をかけがえのないものとしてわれわれに選ばせるのであり、それが人間における主体性ないし自由に他ならない。

いずれにしろ、生後2年目の赤ん坊は、排泄衝動をこらえて、おとなの期待する時期期待する場所で処理しなければならない。だから、この訓練をうまく切りぬけるか否かは、長じて後、それぞれの場面で、周囲の期待に応えうるか否かの自信につながっている。だから、もしこの時期をスムーズにのり切ることに失敗すると、周りの世界と積極的にかかわってゆく自信が育たない。かなり深刻なひっこみ思案と結びつく可能性が大きい、というわけである。

しかし私には、もう一つの大きい課題が、この時期に果たされねばならぬように思われる。排泄衝動が、いわば訪れるものであることは、他の諸々の衝動と変わるところがない。性衝動にしろ攻撃衝動にしろ、われわれには意図的にそれらをひき起すことはできない。そのことは逆に、それが生じないようにすることのできぬことをも意味している。つまり、われわれの中には、われわれが意図的にコントロールできない多くの衝動がある。その中には、一見望ましくないものも含まれているけれども、好むと好まざるにかかわらず、われわれはそれらの発現に対処してゆかねばならない。

衝動の克服とは、したがって、こうした衝動をなくする又は抑圧することでは決してなく、

それらを何らかの社会的に許容された形で処理するテクニックを身につけることである。われわれにできることは、訪れた衝動に直面し、それにどう対処するかということであって、衝動そのものの発現をコントロールすることではない。いわばそれは、内的衝動の社会化である。その意味で、衝動をコントロールしうるか否かの自信の根源は、排泄訓練の成否にかかわっている。

要するに、生後2年目の赤ん坊は、一方で周囲の自分に対する期待に応え、他方、内的衝動をそれなりにコントロールする力を持たねばならない。もちろん、大脳組織の十分に発達していないこの時期、これらの経験が、おとなの場合のように鮮明に記憶に刻みこまれるのではなく、いわば一つのムードとして定着する、ということである。

ついで3年目の課題が来る。この時期、子どもは筋肉や骨格の発達に応じて、著しく活動性が高まってくる。それに伴って危険も増してくるので、おとなとしては子どもの行動を相当禁止しなければならない。ここで失われるのは子どもの自発性である。多かれ少なかれ、われわれが自発性を損なうのは、したがってやむをえないことかもしれない。しかしRogers(1959)のいうように、禁止は必ずしも自発性を損なわない。つまり、すでにのべたように、何らかの衝動の存在はそれ自体禁止されるべきではないし、禁止できるものでもない。それはいわば与えられるのであり、何ら価値的に捉えられるものではない。おとなの与えるものは社会的な禁止である。だから子どもは、排泄衝動と同じく、さまざまな自発的衝動を抑圧するのではなく、社会的に許された形でその満足を求めることを期待されるわけである。

この場合、ある程度の欲求不満の伴うのは当然である。しかし、欲求不満は決して人格の発達を損なうものではなく、むしろ、その克服を通してその成長を促す一面をもっていることに注目しなければならない。すでにのべたように、われわれがゲームから得る充実感は、ルールのもたらす欲求不満を克服した所で獲得されるものである。いずれにしろ、自発的な衝動そのものが拒否されると、それらの衝動は、「悪しき衝動」として子どもたちに経験され、しかもそれらが自発的であればある程、それらがなくなることはないので——抑圧されることはあるにしても——、子どもは自発性を失うだけでなく、一種の罪悪感ないし欠落感に捉えられやすくなる。これらのプロセスについては、以前に考察したことがある（氏原1970）ので、ここではこれ以外のべない。

以上、生後3年までの間に、子どもたちの果すべき課題のごときものについてのべてきた。それらは、いずれも母親とのかかわりを通して達成せらるべきものである。母子関係の特長は、情緒的、主観的、絶対的、全面的、無条件的、といったことばで表現される。それは、母親の側からみて、一言でいえば、まさしくかけがえない人間として子どもを経験することである。だから、この時期におけるつまづきは、子どもたちに極めて深刻な障害をもたらすことになる。多くの精神障害者において、母子一体感の欠如していることは広く知られていることでもある。（たとえば、シュヴィング1972）。

こういう子どもたちが、不登校現象を示すことは、もちろんありうることである。しかし、それらはより根の深い問題の一つの現われなのであって、不登校現象が中核的な症状であるとは思

えない。したがって治療のアプローチも、通常の登校拒否に対するものとはかなり異なってくる。むしろ、どちらかといえば境界例に近い神経症として捉えた方がよい場合が多い。だから、はじめにのべた登校拒否児に対する無条件的受容的アプローチは、それだけがすべてではないにしても、こうした症児にこそふさわしい。したがって、不登校を中核的な症状とする、いわゆる通常の登校拒否は、もう少し違った角度からみてゆかねばならぬのではないか、というのが本論文の要旨である。

### （３）父性原理——主体性のはじまり

#### イ．発達の側面

結論を先にいえば、私は、登校拒否の中核群——不登校を主症状とするもの、ただしこれにも若干の発達の差異がある——は、父性原理のとり入れに失敗した子どもたちだと考えている。つまり子どもたちは、発達のある段階で、いやおうなしに母親とだけの世界から、より広い世界に出てゆかねばならない。それは、広い意味の世の中の存在に気づくことであって、どのように緊密な母子関係で結びついている母子でも、いずれ外側の世界と折りあいをつけねばならない。そうしない限り、子どもは母親もろともどこかに吹きとばされ、あげく母子バラバラになりかねないのである。この時期をどのへんにおくかは、今後の研究にまたねばならないのだが、現在の段階で、私は、大体４～５歳頃ではないかと思っている。これは子どもたちがボツボツ幼稚園に行き始める頃であり、母親以外の人たち、とくに同年輩の子どもたちと接触し始める時期である。

要するに、子どもたちにとって、遅かれ早かれ、今までの母親とだけの世界は崩れるのである。ないしは、母親との世界を守るためには、母親以外の世界と折りあいをつけねばならない。このことに失敗した時、子どもはふたたび母親とだけの世界に戻ろうとする。その場合、家庭は胎内である。それが不登校現象のメカニズムだと私は考えている。だとすれば、こうした子どもたちに母性的に関わることは、むしろ有害ということになる。母子一体感によってつちかわれた絶対的な自信をもって、子どもは次の相対的な段階に進まねばならないからである。ここで父性原理がとり入れられねばならない。だから、この時期、子どもにとって父親の存在は極めて大きい意味を持っている。又、もしこのタイプの不登校児を治療的に扱うことになれば、年令のいかんを問わず、治療者は父親的なありようで接しなければならない。両親が、父性的なものを子どもに伝えることに失敗しているからである。そのあたりの見通しが、今までのわが国では、もう一つ明確化されていなかったのではないか、という気持が私にはある。

#### ロ．父性の遅しさ

そこで父親の役割についてであるが、まず第１は、力強い保護者としての遅しさであろう。つ

まり、父親の存在する限り、外側の世界からのどんな脅威もはね返される、という安心感である。しばしばうんぬんされる、登校拒否児の父親の無力性は、このことと無関係ではない。ただしこのレベルでは、父親は、子どもと母親との世界を守るための、消極的な役割しかとれていない。しかし父親には、さらに積極的な役割が必要である。社会的には十分に強力と思われる、いわゆる成功者の子弟で不登校現象をひき起す者が少なくないのは、その面の不十分さのためと考えられる。

つまり、父親は一方では社会に対して家庭を守る防波堤であるが、他方、社会を代表して子どもに立ち向う存在でもある。父親は家庭の外で、つまり社会とかかわることによって家庭を支えている。社会とは共同生活の場であって、そこにはいやおうなしに一定のルールがある。このルールをふみ外しては、社会と折りあいをつけることができない。だからルールさえ守れば社会は決して怖るべきものではないのだが、ルールを無視して自分を生かすこともできないのである。父親の役割は、このことを身をもって子どもに示すことである。だから、子どもが好むと好まざるにかかわらず、やるべきことはやらせなければならない。どんないやなことでもやらねばならぬことがあるし、どんなにやりたいことでも、我慢しなければならないことがある。

たとえば、幼稚園ないし小学校低学年の子どもで、母親から離れることのできない子どもがいる。有名なハーローの実験（ハーロー1978）をまつまでもなく、子どもは、いつでも逃げ帰れる母親がある場合にのみ、積極的な探索活動が可能になる。逆説的にいえば、母親との結びつきの強い子ども程、母親から離れやすいのである。母親とのつながりに自信のない子どもは、いつ母親に捨てられるか判らないので、かえってしょつ中母親にしがみつかなければならぬということであろう。

いずれにしても、このレベルの不登校は一種のわがままである。これを許すと、自分だけは学校へ行かなくてもよい、という非現実的な一種の万能感の生ずる場合がある。こういう時、まずこの万能感を叩きつぶすことが、治療者の第1の課題となる。以前に発表したある教頭のケース（氏原1966）はこれに当る。この教頭がいる限りどうあがいても登校させられる、という認識が、1年以上続いた小学校6年の男の子の不登校をくいとめたものである。最近の例では、行動療法的枠組の中ではあるが、園田（1977）の試みも似たような方法と思われる。この場合、無理に登校させる結果生じてくる二次的症状のために、ついためらいがちになるのだが、症児の行動観察から不登校以外に目立った不適応行動のない場合、断固として臨むと意外な程の著効を生むことが多い。必ずしも低年齢群だけとはいいい切れないが、概して低学年の、文字通り母子分離の十分にできていないタイプである。性格的にそれ程大きい障害があるわけではなく、いわば過保護による訓練不足といってもよいくらいのものが多い。

もちろん、母子関係の不十分さからくる不登校もあるのだから、何が何でも無理に登校させるのがよい、というわけではない。ただ、完璧な母子関係などというものはもともとありえないのだから、何事も程度の問題である。だから、母子関係における欠けた部分を補うか、むしろ母子



関係の中に逃げこもうとするのをひきずり出すか、の判断は必ずしも容易ではない。しかしいずれにせよ、子どもは社会化されねばならず、そのためには、ただ母子関係を充実させるというだけではなく、新しいありようとして、何らかの形で父性原理を取り入れねばならないのは確実であり、それが、断固たる父親の態度から発することはいうをまたない。

なおここで一言つけ加えておかなば、ここでいう母性原理なり父性原理は、必ずしも女性又は男性に限られるものではない。だから、母親が父性原理を代表して子どもと対決することはありうるし、父親が母性的に子どもと接することも可能である。だからこれらのことばは、われわれの心の動きの二面性を便宜的にそのように表現しているのにすぎない。しいていえば、母性原理は比較的女性に、男性原理は比較の男性に親和的、といえる程度のことである。

#### ハ．父性原理の条件性

さて、以上のべてきたことから、父親による受容が、いわば条件的なものであることが知れるであろう。つまり父親は、「よくやった」とか「よく我慢した」ということで子どもを承認する。決してあるがままの子どもをうけ入れるのではない。いい代えれば、何らかの意志的な行為、主体としての働きかけを承認する。これが父性原理の母性的な全面受容と根本的に異なる点である。しかしそのことは、両者が相反的であることを意味しない。子どもの側からいえば、母性原理に基づく絶対的な自己受容があつてこそ、厳しい条件的承認に耐えうるのである。一定の条件を満たし得ないものを、わが子といえども切り捨てるのが、父性——ロゴスの原理に他ならない。

ただしここで考えておかねばならないことは、この条件が、必ずしも客観的な基準を意味していないことである。つまり、外界に働きかけてゆく、いい代えれば、外界を自分のコントロールのもとにくみこんでゆく、その能力には個人差がある。だから、ある子どもに期待できることが、他の子どもにも同じように期待できるとは限らない。しかし、やるべきことを一つ一つ解決してゆくにつれて、われわれは、必ずしも環境に左右されない自立性を獲得してゆく。環境からの完全な自立は、もとより誰しもが望むべくもないけれども、存在とは、つねに主体と環境との相互作用である。そして父親の期待は、子どもの能力のいかんを問わず、たえず子どもが世界に主体的にかかわることなのである。

それは、やるべきことはやらせるという、一見、子どもたちを強制的に世界に合わせさせるような形をとるけれども、実は、それによって自らを最大限に生かす術を鍛えこんでいることに他ならない。ゲームを十二分に味わおうとすれば、まずルールを覚えこまねばならないように、である。ここに父性原理のもつパラドックスがある。つまり、野球には野球のルールがある。バスケットボールにはバスケットのルールがある。子どもがどのゲームを選ぶかは、子どものもつ条件次第である。ルールに差はあつても、それぞれのゲームに優劣はない。変らないことは、それが何であれ、子どもは何らかのルールに従い、そこで精一杯やらねばならぬ、ということである。

#### (4) 父性——相対的原理

以上、母性原理に基づく母親とのかかわりが、子どもの基本的安定感の形成に決定的に重要なことをのべてきた。このような安定感は絶対的、全体的なものであるが、同時にきわめて主観的なものである。だから子どもたちは、こうした主観的安定感に支えられながら、客観的な現実世界を同化してゆかねばならない。父性の厳しさは、この世界の客観的なルールをとりこませるためのものである。いわゆる小児的万能感にいろどられた主観的空想の世界を打破するのが、この時期の父親の役割である。

##### イ. 比較の原理

しかし、発達次の段階では、自分自身の客観的認知が必要である。このことは、外側の世界とのかかわりを通して、必然的に子どもの中に生ずる。多分4～5歳以降、子どもたちが幼稚園なり小学校に進むようになると、彼らはいやおうなしに同年輩の仲間と接触する。そして、意識すると否とにかかわらず、お互いを比較するようになる。誰それは走るの早いけれども唱はへたで、体は大きいのにすぐ泣き出す、というように。それが自分と比べてかみんなと比べてかは、この場合問題にならない。何らかの外的な尺度を通して、自分ないし相手をみることが重要なのである。

しかしここで考えておかねばならないことは、比較がつねに一面的なものにすぎないことである。つまり、人間とはもともとトータルな存在であるから、お互いの存在の意味を比較することができない。基本的人権とか人間の尊厳性とか言われているものは、本来比較をこえたレベルについてのものである。人が何によって意味を満たすかは、まさしく各人各様なのであり、それを共通の尺度で測ることはできない。取えてそれをやるとすれば、それは、100メートル競争の優勝者とマラソンの優勝者のどちらが本当に速いのか、といったナンセンスな問いかけに終るのがオチである。しかし、われわれがトータルな存在であることは、同時にわれわれが多面的な存在であることをも意味している。そうするとその一面だけをとり上げた場合、お互いを共通の尺度で位置づけることが可能なのである。たとえば、身長という一面、あるいは収入とか社会的地位とか、絵に対する才能とか、現実のピアニストとしての能力だとか。

一面はすべてではない。又、多くの一面を集めたからといって、全面的なトータリティが回復されるものでもない。存在とはつねにトータルなものだから、一面的な分析がいかに鋭いものであっても、又、それがどれ程多面的に行なわれても、それで存在のすべてを捉えたことにはならない。しかし、こうした一面を明らかにしてゆくことによって、ある程度、自分の姿を把握できるのも事実である。たとえば、自分は背が高くやせていて、年はとっているけれども収入はそれ程多くなく、才能には恵まれていないけれども、努力によってかなりの力量を身につけている、性格は明るいがまじめで粘り強い、などなどである、明らかにのべられていないけれども、これら

の記述にはすべて、何らかの外的尺度に基づく比較が含まれている。もちろん、そういうやり方で自分のすべてが尽くされるわけではない。しかし、それによって一応のイメージが浮かび、それに基づいて、この客観世界でいかにあるべきか、の方向性の定まるのも事実である。

#### ロ．劣等性に直面すること

比較とは要するに、自らの相対性を客観的に認識するてだてなのである。その結果、いやおうなしに、自らの優越性ないし劣等性が露わになってくる。父性原理とは、とくに、こういう場合の自らの劣等性ないし限界をひきうける態度である。主観的、全面的、絶対的な世界から、客観的、一面的、相対的な世界への移行を、社会的なかかわりを通して促がす働きである。もちろんそれは、母性原理と相反的な意味においてではない。むしろ、母性原理を基礎にふまえた上部構造として、相補的な関係にある。

しかし、このような一面的な優劣が、何らかの価値と結びつくと、しばしば全面的な思い上りや傷つきにつながることがある。価値体験はつねに全面的なものだからである。多くの場合、子どもは一面的な優劣を単なる事実としてうけとめて、そのことにそれ程わずらわされることはない。しかし何らかの価値観が形成されるにつれ——それ自体きわめて興味深い発達のプロセスである——、だんだんそれにこだわるようになり、ついには子どものすべての行動を背後から動かす程の力をもつことさえある。

その結果、ここに奇妙な現象が生ずる。つまり、トータルな存在が一面でつまづくことに対する、一種の違和感のようなものが起ってくるらしい。そしてそれは、そうした傷つきの経験を否定する、という形をとる。その場合思い出されるのは、人間とは比較をこえるもの、という母性原理である。人間とはもともとすべて同じものである、という母性原理に基づく実感が、実際には存在する個人差（それらがすべて一面的なものであることは、すでにのべた）を否定しようとする。それは最近特に教育界に見られる、個人差の顕在化するチャンスをできるだけなくそうとする、悪平等主義となって現われる。それは、ある人々からは伸びる可能性を奪ってしまい、別の人にも、客観的な自己認知を妨げて、現実的に世界に立ち向う意欲を失わせてしまうから、ほとんどの場合マイナスの効果しかもたらさないのであるが、もともとレベルの違う問題を、同一平面の上で無理につじつまを合わせようとしたとがである。つまり、絶対的主観的な母性原理は、相対的客観的な父性原理と、より高次のレベルで統合されることはあっても、お互いの立場を固執したままで、同一の次元で出合うことはできないのである。

他方、一面的なつまづきに全面的に傷つくことへの疑問が、もう少し違った形で現われることもある。それは、母性的な実感に基づくことでは前述の人々と変わらないのだが、その志向する所は既成の価値の否定で、人間存在の、本来的な比較をこえたありようをめざすものである。既成の価値の否定を含んでいるだけに、一見奇矯なかつ過激な様相を示すことがあるが、その積極的な意味は認めねばならない。もっとも、傷つきから出発したものでもあるだけに、その癒しに

は、かなりの時間が必要なようである。

#### ハ．登校拒否の中核群

ところで、私が登校拒否の中核群と考えているのは、限られた一面性の中の劣等性すら認めようとしない子どもたちである。前の小節にのべた人たちは、一応、ある面での劣等性には気づいている。それが一面的であるにもかかわらず、全面的に自分の傷つくことに彼らは納得できない。ところが不登校現象を示す子どもたちは、傷ついたまさにその一面の劣等性すらうけ入れようとしないのである。しかし、現実には個人差の存在する以上、多くの面でわれわれはお互いの優劣に気づかざるをえない。子どもは、できるだけその事実気づくまいとする。しかし現実の諸状況がいやおうなしに迫ってくると、どうしてもその事実直面せざるをえない。ここで比較の場面からの逃避が始まる。つまり、父性的——ということは客観的——な学校場面から、比較のない、母性的な家庭に逃げ帰るわけである。

だからこういう子どもたちに対して、母性的なアプローチで接することは、彼らをますます非現実的な方向に追いやるだけのことが多い。彼らに何よりも必要なことは、客観的な自己認知、自らの劣等性と限界をうけ入れることである。父性原理のマイナス面は、それが一面でわり切って全体を否定する危険性のあること、そのためトータルとしての存在が細分化され非人間化されかねないことである。しかしそれにもかかわらず、一面的な劣等性を認めることなしに、トータルな存在としての自己の再編成はありえない。具体的にそれがどういうプロセスを経て達せられるのかは、文字通りケースバイケースで、一般論としてうんぬんすることはできない。ただ、最近の子どもたちは、自分の限界や劣等性に直面することに馴れていないので、かなり肥大した自己概念をもっており、それを現実の自分に合わせてゆくのがかなり難しいことは、経験的にいって確かなことのように思われる。

#### ニ．無限の可能性について

なお、以上のような考え方が、時に教育的立場から批判されることがあるので、一言つけ加えておく。

その一つはすでにのべた悪平等主義である。つまり、人間とは本来平等なのだから、お互いの能力差をできるだけ目立たないようにする。また、一人一人の意味はそれぞれが満たすべきものなのだから、自分を確かめるのに人と比較する必要はない。無限の可能性を秘めた子どもに限界を設けるのは有害無益である。努力さえすれば道は開けるのだから、せっ角の意欲に水を注いではいけない、などの意見である。

はじめの点については、すでにふれたことであるので、ここではくり返さない。そこで後半の見解について述べると、まず、無限の可能性というのは一つの幻想である。たしかに、われわれは多くの可能性をもって生れてくるけれども、そのうち実現できるものはほんの一部にしかすぎ

ない。たとえば音楽家としての素質を十分に生かそうとすれば、大部分の時間とエネルギーがそれに費される。だからせつ角画家としての才能に恵まれていても、それを生かす余裕はほとんどない。つまりわれわれは、多くの可能性の中から、いくつかを選択しなければならず、あらゆる可能性をすべて生かすことはできないのである。

又、努力さえすればなんとかなる、というのも一面的な事実であって、他面、いくら努力しても仕方がない場合がある。才能のないものが何年がんばっても、才能のある者の1年分の成果も上らないことは、とくに芸術の分野をみれば自明のことである。ここでおとなが、子どもの器を見きわめて、ある程度子どもの夢を打ち砕き、目標を変更させなければならぬ場合さえ生じてくる。たとえば、子どもが画家になりたいとかプロ野球の選手になりたい、という時、われわれは子どもの才能がどの程度のものであるのか、まず確かめねばならない。それは、本人がどれだけそのことに情熱を燃やしているか、あるいは、生きがいを感じているか、ということで決められるものではなく、他の子どもと比べて子どもの技量がどれだけ秀れているか、という問題である。もしも大したものではないと判れば、いやおうなしに子どもに断念させなければならぬ。

もちろん、タイミングとかいい方の問題はあるにしろ、根本的な姿勢は同じものである。子どもはいずれおとなになる。おとなになれば自分で食わねばならない。となると、単に好き嫌いだけで将来の方針をまとめるわけにゆかないのである。その意味で、いかにして父性原理、つまりロゴスの原理をとり入れるかが、子どもにとってどれ程大切かはおのずから明らかなことと思う。しかし、最近の日本における家庭および学校の、子どもに対してバカに物判りのよすぎる態度が、こうしたありようをスポイルしているように思うのは、私だけのことであろうか。

#### ホ．悪しき母性本能

ところで、最近のわが国の家庭では、多かれ少なかれ、登校拒否を助長する雰囲気があるように思われるので、それについて簡単にふれて本論を終りたい。それは、母性原理の悪しき側面とでもいうべきものである。

一つは、はじめにのべた母子一体感のことである。こうしたつながりが、子どもの基本的安定感の形成に、決定的に重要な意味をもつことはすでにのべた。しかし、これがゆきすぎると具合が悪いのである。(なおここでいう母子一体感は、親子一体感ということばでおき代えてもよいものであり、要するに親子の間の母性的なつながりということであって、必ずしも生物学的な母子である必要はない)。こうなると、親は子どもつき放してみることができなくなる。親子未分化のままに一体となってしまう、知らず知らずのうちに、子どもは、親の願望を満たす道具のようになってしまう。親の期待が大きくなりすぎると、親は子どもをありのままの姿で見ることができなくなる。だから、立派な先生につけさえすればわが子がバレリーナになれる、と思いつめたり、よい塾を選んでやりさえすれば望みの学校へ入れるかもしれぬ、と期待する。その場合、子どもの能力や望みはほとんど目に入らない。つまり、条件さえととのえてやれば、子どもは何にで

もなれるような錯覚に捉えられるのである。

問題は、こうした親の態度がそのまま子どもにとり入れられるところにある。彼らも又、自らの限界を見ようとしな。その結果、現実場面の挫折はことごとく周囲の責任である。不登校児の中には、しばしば、ステレオを買ってくれたらとか、海外旅行を許してくれれば登校できる、などという者がある。いずれも問題の所在を自分の中に認めようとせず、周囲のせいにしようとする態度のあらわれである。だから、いいなりになっても学校へ行くことはほとんどない。こういう場合こそ、まず子どもに自らの限界を思い知らせなければならない。多くは、親の態度の改善と共に子どもにも変化が生じている。しかし、もともと親に内在している不安全感がこのような甘さを引き起しているだけに、こういうケースでは、親に対するかなりインテシヴな働きかけが必要である。その際、子どもの抵抗に親がふり回されやすいので、かなり支持的な態度で臨まねばならぬことが多い。

もう一つは、さきに悪しき父性原理として軽くふれたことである。私自身は、これも又、悪しき母性の表われ、といった方がよいように思っている。母性原理が全面的、絶対的なものであることはすでに何度かのべた。その肯定的な力は、比較をこえた所で発揮される。しかし、これが誤った形で父性原理をとりこむと、かえって現実を歪めてしまうのである。つまり、母性的心性が比較しはじめると、比較の一面性が見失われ、それで全面がわり切られやすいのである。だから、もし母性が子どもの成績にこだわると、その優劣が子どものすべてを決めてしまい、子どものもつやさしさや器用さは見えなくなってしまう。それが夫の社会的地位に向けられると、そのことだけが夫のすべての値打ちを決めてしまい、現実の状況とか夫の気持ちなどにはお構いなく、いわば「甲斐性なしはろくでなし」といった切り捨て方になり易い。そのために、子どもも夫も、自分の可能性を試す分野を極端に狭められて、しかもそこに自らの劣等性しか見出せぬ場合、容易に挫折してしまうわけである。こういう時治療者は、子どもの劣等性を認めた上で、同時にその全体性に目を注いでやらなければならない。つまり、一面的な劣等性が決して全体としての価値を傷つけることがないことを、身をもって子どもに伝えなければならない。これは、現実的なハンディキャップをせおった人間の、そのハンディキャップに目をすえながら、なお人間存在の意味がそれとは違ったレベルにあることを、子どもと分かちあうプロセスである。しかし治療が進展しても、ハンディキャップはそのまま残るのだから、それにどう対応してゆくかは、子ども自身にとっての生涯の問題といわねばならない。そのへんの見極めが、父性原理のもつ暖かさと同時に厳しさでもある。

## 要 約

登校拒否の中核群を、父性原理のとり入れ失敗によるもの、としてのべた。したがって、しばしば主張される、症児に対する母性的アプローチについて疑問をのべたことになる。発達的にみ

て、子どもは母性的な主観の世界から、父性的な客観世界へ移行しなければならない。それは、自らの相対性を客観的に認識することを意味しているが、その際、自己の限界ないし劣等性に直面することが多い。不登校は、そのような現実場面としての学校から、比較のない家庭への逃避現象だ、と考える。なお、父性的な比較の一面性についてふれ、それと母性的な全面的、絶対的なありようとの統合の失敗が、不登校を招きやすいことをのべた。又、父性原理をスポイルしやすい学校および家庭の状況についてもふれた。

〔付記〕 本論文の要旨は、日本教育心理学会第20回総会において発表した。

#### 参考文献

- ボールビィ, J. (黒田他訳) 1978 母子関係の理論 II 分離不安 岩崎学術出版社  
土居健郎 1974 甘えの構造 弘文堂  
エリクソン, E. H. (小川・小此木訳) 1977 健康なパーソナリティの成長と危機 小此木啓吾 (訳編) 自我同一性 誠信書房 49~129  
エリクソン, E. H. (仁科弥生訳) 1978 幼児期と社会 1 みずす書房  
ハーロー, H. F. (浜田寿美男訳) 1978 愛のなりたち ミネルヴァ書房  
Johnson, A. M. 1941 School phobia Am. J. Orthopshchiat.  
河合隼雄 1976 母性社会日本の病理 中央公論社  
木村敏 1972 人と人との間 弘文堂  
マッセン, P. H. ほか (三宅和夫訳) 1971 発達心理学 I 誠信書房  
中井・山中 (編) 1978 思春期の精神病理と治療 岩崎学術出版社  
ポルトマン, A. (高木正孝訳) 1972 人間はどこまで動物か 岩波書店  
Rogers, C. R. 1959 A theory of therapy, personality and interpersonal relationship in the client-centered framework in Koch, S. (ed.) Psychology: A Study of science vol. III McGraw Hill.  
シュヴィング, G. (小川・船渡川訳) 1972 精神病者の魂への道 みずす書房  
園田順一 1977 登校拒否への行動療法的アプローチ 精神療法 vol. 3, No. 3 金剛出版 27~34  
氏原寛 1966 登校拒否——その自己理論 (self-theory) による検討 大阪市教育研究所紀要 92~1, 1~32  
氏原寛 1970 ロジャーズ理論の本質 教育と医学 vol. 18, No. 1 38~43